

東京大学大学院人文社会系研究科
次世代人文社会学育成プログラムによる海外派遣
帰国報告

最終報告提出日

2011 年 3 月 27 日

派遣生の基本情報

氏名：金子裕介

所属先：人文社会系研究科基礎文化研究専攻哲学 哲学研究室

派遣形態：PD

研究テーマ：ドイツ語圏における分析哲学の現在とウィーン学団の現況

派遣先での活動

(1) 派遣先の基本情報

オーストリア ウィーン ウィーン大学
ウィーン学団研究所 (http://www.univie.ac.at/ivc/index_e.htm)

(2) 派遣期間

出発日：2010 年 9 月 2 日
帰国日：2011 年 2 月 26 日 総日数：177 日

主な研究成果

(1) 当初の計画の概要

ドイツ観念論や現象学に限定されない、ドイツ語圏の哲学の新たな側面を、「ウィーン学団」をキーワードに学んで来る、ということが当初の計画であった。それにより、現代英米哲学に偏りつつある自分の研究（あるいは哲学的思考）に、ドイツ語で語られる哲学—

その哲学は、たとえウィーン学団であっても、伝統的哲学を無視するのではなく、継承するという性格を持つと思われた一の奥行きと広がり、与えたいと思った。

(2) 実際に達成された成果

ウィーン学団研究所で開かれるコロキウムに参加することを通じて、現在のドイツ語圏の哲学（厳密にはオーストリア哲学）の状況を、一通り、概観することができた。個人的には、研究者たちが歴史に重点を置いている、ということに強く印象付けられた。これは、私を受け入れてくれた、フリードリヒ・スタッドラー教授が、この分野（ウィーン学団の歴史）の権威でもある、という事情にもよると思われる。

ウィーン大学では、主に、次の二つの会合に参加した。

① 科学哲学コロキウム

(毎週火曜 5 時～7 時：主催者リチャード・ダンベック博士)

<http://www.univie.ac.at/ivc/koll/index.html>

② 科学哲学レクチャーシリーズ

(毎週木曜 5 時 15 分～6 時 45 分：主催者マーティン・クッシュ教授)

<http://wissenschaftstheorie.univie.ac.at/en/lecture-series/>

スタッドラー教授の講義にも出席した。その他、ウィーン大学のドイツ語講座も受講した。

(3) 今後の研究展望

以前から、帰納論理（これは後期カルナップの哲学に位置づけられる）を中心に研究していた、カルナップの哲学を一から勉強してみようという気になった。特に、初期カルナップのドイツ語で書かれた著作は、中期・後期の著作には見られない哲学的雰囲気を持っており、今の私には大いに魅力的である。

しかし、その様なモチベーションは、ウィーン学団研究所の人々が持っている、カルナップやシュリックといったウィーン学団そのものへの熱意と敬意によって与えられたものである。